

いただきますを言う時

仙台市立南中山中学校 2年 野川 玲

「一知半解」とは、まさにこの事だと思った。そう思ったのは、五月に行った野外活動での出来事がきっかけだった。

野外活動では、ササニシキの交配の元であるササシグレを栽培しているお宅にお邪魔させてもらった。そのお宅では、色々な作業を体験させてもらった。

一つ目は、育苗箱の中の苗を田植え機に移す作業だった。育苗箱から苗を取るには、腕がちぎれるくらいの力が必要だった。

二つ目は、育苗箱を整理する作業だった。実に約四千箱もの育苗箱を、種類ごとに積み重ねていった。忍耐力を求められる仕事だった。全ての育苗箱を積み終わると、今までに感じたことのない達成感に包まれた。

三つ目は、大豆を畑に植える作業だった。単純な作業だったが、大豆を植える面積がバスケットボールのコート並にあったので、忍耐力も必要だったが、更に体力も必要だった。そして、どの作業も室外だったため、日光が当たり、とてつもなく暑かった。

休憩時間には、どのような気持ちで米作りをしているか、生産者さんから話を聞くことができた。そのお宅では、食べる人の健康を考え、無農薬にこだわっているそうだ。食べる人の健康を考えているのが、とても素晴らしいと思った。その話を聞いた時、私は「いただきます」を言う時も、料理を口に「おいしい」と言う時も、「ごちそうさま」と言う時も、生産者さんのことを考えて無いことに気付いた。決して、身近に「食」を大切にする人がいない訳ではない。母も祖父も祖母も、食事の礼儀を大切にするため、私は毎回「いただきます」も「ごちそうさま」も言っていた。

しかし、私は食べ物や食事を大切にするということを分かっている

ようで、分かっていなかったのだ。「一知半解」とは、まさにこのことだと思った。食べ物や食事を大切にすることとは、生産者さんや食べ物に関わる方々の気持ちを考えてこそ、食べ物や食事を大切にすることなのだと思った。

たった数日間の体験活動だったが、とても辛く、しかし、とても充実した時間となった。

現在では、農作業の多くは機械に頼っているが、実はまだまだ人の手を借りる作業が多い。農業を仕事にしている人は、とても疲れる作業を毎日やっていてすごいと、今回の野外活動で心から思った。

野外活動から帰ってきてから、私の生活は変わった。買い物で商品を選ぶ時や毎日の食事の際に、生産者さんの食べ物を大切に育てている気持ちを考えるようになった。生産者さんの気持ちを考えるようになったことで、私は食べ物を残さなくなった。そして、自分が食べられない食事の量だと思ったら、給食では他の人に譲って、家の食事では次の日に食べられるように、取っておくようになった。これは、食べ物や食事を大切にするという点において、とても成長したことだと思った。

私が今までの体験を通して考えたことは、もっと沢山の人が食事の際に、生産者さんのことや彼らの気持ちを考えてほしい、ということだ。そして、私は野外活動で生産者さんのお米作りへの話を聞いて、食べ物や食事を大切に、食べ物や生産者さんに感謝するという考えを、次の世代に言葉を通して伝えていきたいと思った。